

登録番号 第 23596 号

Dr. オリゼ®プリンス®スピノ粒剤6

●育苗箱施用で、水稻初期・中期の主要病害虫であるいもち病、イネドロオイムシ、イネミズゾウムシ、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イナゴ類等を同時防除できます。

●殺虫メカニズムの異なるスピノサドとフィプロニルが組み合わせられることでユニークな相乗効果が発揮されます。

Dr. オリゼは三井化学クロップ&ライフソリューション(株)の登録商標、プリンスはBASF社の登録商標、スピノはザ・ダウ・ケミカル・カンパニーまたはその関連会社商標です。

有効成分	スピノサド・・・0.75% フィプロニル・・・0.60% プロベナゾール（化管法第1種）・・・24.0%	包装	1kg×12 9kg×1
性状	類白色細粒	有効年限	3年
毒性	普通物*	危険物	-

*普通物：「毒物及び劇物取締法」（厚生労働省）に基づく、特定毒物、毒物、劇物の指定を受けない物質を示す。

【適用病害虫及び使用方法】

2023年4月1日付内容

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	スピノサドを含む農薬の総使用回数	フィプロニルを含む農薬の総使用回数	プロベナゾールを含む農薬の総使用回数
稲(箱育苗)	いもち病 イネドロオイムシ イネミズゾウムシ ニカメイチュウ イナゴ類 ウカ類	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当たり50g	移植3日前～移植当日	1回	育苗箱の苗の上から均一に散布する。	1回	1回	2回以内 (移植時までの処理は1回以内)
	フタオビコヤガ	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当たり50g	緑化期～移植当日					

使用上の注意事項

- 使用量に合わせて秤量し、使いきること。
- 育苗箱の苗の上から所定薬量を均一に散布し、茎葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水して田植機にかけて移植すること。
- 軟弱徒長苗、むれ苗、移植適期を過ぎた苗などでは薬害を生じるおそれがあるので、必ず健苗に使用すること。
- 稲苗の葉がぬれていると、薬剤が付着して薬害を生じる場合もあるので、散布直前の灌水はさけること。
- 薬剤が育苗箱からこぼれ落ちないように処理を行うこと。
- 育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）1箱当りに乾初として200から300g程度を高密度には種する場合は、10a当りの育苗箱数に応じて、本剤の使用量が1kg/10aまでとなるよう、育苗箱1箱当りの薬量を50から100gまでの範囲で調整すること。
- 処理苗を移植する本田の整地が不均整な場合は薬害を生じやすいので、代かきはていねいに行い、移植後に田面が露出しないよう注意すること。
- 処理苗を本田に移植した後は、そのまま湛水状態（湛水深3～5cm）を保ち、稲苗が活着するまで田面が露出しないよう水管理に注意すること。

- (9) 本田が砂質土壌の水田や漏水田、未熟有機物多用田での使用はさけること。
- (10) 移植後、低温が続く、苗の活着遅延が予測される場合には使用をさけること。
- (11) 本剤は処理を誤ると、生育初期の葉の黄化や生育遅延などの薬害を生じるので、所定の使用時期、使用方法を守ること。
- (12) 本剤の使用に当たっては、使用量、使用時期、使用方法等を誤らないよう注意し、特に初めて使用する場合には病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

人畜に有毒な農薬については、その旨及び解毒方法

- (1) 誤食などのないよう注意すること。
誤って飲み込んだ場合には吐き出させ、直ちに医師の手当を受けさせること。
- (2) フィプロニルによる中毒に対しては、動物実験でフェノバルビタール製剤の投与が有効であると報告されている。
- (3) 本剤は眼に対して刺激性があるので、眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受けること。
- (4) 散布の際は農薬用マスク、手袋、不浸透性防除衣などを着用するとともに保護クリームを使用すること。
作業後は直ちに身体を洗い流し、うがいをするとともに衣服を交換すること。
- (5) 作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯すること。
- (6) かぶれやすい体質の人は作業に従事しないようにし、施用した作物等との接触をさけること。
- (7) 夏期高温時の使用をさけること。

水産動植物に有毒な農薬については、その旨

- (1) 水産動植物(魚類)に影響を及ぼすので、本剤を使用した苗は養魚田に移植しないこと。
- (2) 移植後は河川、養殖池等に流入しないよう水管理に注意すること。
- (3) 水産動植物(甲殻類)に影響を及ぼすので、河川、養殖池等に流入しないよう水管理に注意すること。
- (4) 散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。また、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。

引火し、爆発し、又は皮膚を害する等の危険のある農薬については、その旨

通常の使用方法ではその該当がない。

貯蔵上の注意事項

直射日光をさけ、なるべく低温で乾燥した場所に密封して保管すること。